神奈川

全国一斉の採用広報活動
地本キャラ「はまにゃん」との交流も

広報活動中の「はまにゃん」

神奈川地方協力本部は7月21日、陸・海・空自衛隊が一体となって採用広報活動を展開する全国統一の夏季採用広報キャンペーン「陸海空自衛隊サマー・フレンドシップキャンペーン」の一環として、市街地広報を行いました。

本部と12の出張所などをあてが参加し、県内13カ所の駅周辺にてチラシやステッカーなどを配布しました。

また、地本キャラクター「はまにゃん」も駆け付け、写真撮影に応じるなど住民らと交流を図りながら広報活動に励みました。

チラシを受け取った男性は「自衛隊のイベントなどには行ったことがなかったけれど、今度機会があれば行ってみたい」と話し、また「姉が海上自衛官です」と快くアンケートに回答してくださった女性もいました。

自らも生徒たちにチラシを手渡した平井本部長は「全国一斉のキャンペーンにより募集広報の相乗効果を図るとともに、厳しい募集環境を共に戦う一体感を醸成できれば」と話していました。

サマーキャンペーンをきっかけに一人でも多くの方に自衛隊の魅力を知っていただけるよう、一丸となって取り組んでいきたいと思います。

千葉

サマー・フレンドシップキャンペーン
募集の厳しさを乗り越え自衛隊への理解を促進

地本職員と家族会会員

千葉地方協力本部は7月21日、県内各地で陸海空自衛隊サマー・フレンドシップキャンペーンに伴う市街地広報を行いました。

本市街地広報は、自衛官等の募集環境が少子化による募集対象者人口の減少により、ますます厳しくなっている状況の中、陸・海・空自衛隊が一体となって採用広報活動を展開することが重要であるとの判断から行ったものです。

この広報活動は、本部庁舎および県内8カ所の募集事務所周辺で協力団体のご支援を受けながら市街地広報を行いました。

「絆（資料請求ができる自衛官募集広告業書）」を同封したポケットティッシュ、サマー・フレンドシップキャンペーンのリーフレットおよびシールを配布して、自衛隊への理解を促進し、受験意欲の向上を図りました。

特に、JR西千葉駅北口ロータリー周辺での活動では、大学や高等学校の学生・生徒に対し、高橋本部長自らが陣頭に立ち、地本各課職員の力を結集し、千葉県自衛隊家族会安部会長はじめとする会員の方々のご協力を得て、用意した約700個のポケットティッシュを配布し自衛隊を広報することができました。

委嘱状の交付

沖縄地方協力本部宮古島出張所は7月11日、多良間村役場において、令和5年度多良間村自衛官募集相談員連名委嘱式を行い、2人の方に委嘱しました。

激励の挨拶において、多良間村役場総務財政課長が「自衛隊は国を守り、世界に貢献し、国内外の災害復旧にも務めています。昨年度は多良間村出身の若い自衛官が3人誕生しました。自衛官募集も大変厳しくなっていますが、これまで同様に頑張っていただきたい」と述べました。

引き続き、久保本部長は「多良間村出身の3人の方に、自衛官を職業として選んでいただきました。防衛力強化の中核は人です。人をしっかりと確保することが重要なので、お力をお貸ししていただきたい」と述べ激励しました。

また翌12日、宮古島市役所において、令和5年度宮古島市自衛官募集相談員連名委嘱式を行い、9人に委嘱しました。

激励のあいさつにおいて宮古島市長は「昨年度は、本市から7人が自衛隊に入隊しました。自衛隊の活動は国の安全、国土の防衛、大規模災害での緊急救助活動など、大変重要な役割を果たしています。今後も自衛隊と本市の懸け橋として協力をお願いします」と述べました。

久保本部長は「皆さんは、われわれにとって大切なパートナーです。防衛力整備計画の中でも、地域コミュニティとの連携は重要な事項です。自衛隊がしっかり活動や訓練をする上で、地域の皆さんの力は欠かせません」と述べました。

委嘱者代表あいさつにおいて、野原勝也氏が「県で1番の採用数となるよう頑張りたい」と決意を表明し、閉式しました。

沖縄

自衛官募集相談員連名委嘱式
地域コミュニティとの連携を強調

Going! PCO

宮城

陸上幕僚長が初度視察
広報官との懇談を通し現場の現状を把握

状況報告する諏訪本部長（手前右一人目）

宮城地方協力本部は7月7日、森下陸上幕僚長の初度視察を受察しました。

森下陸幕長は、宮城地本があある仙台第3合同庁舎において、諏訪本部長から自衛官募集、就職援護の状況などについて報告を受けたのち、仙台駅東口募集案内所に移動して、広報官と懇談を行いました。

懇談は、終始なごやかな空気の中、参加した広報官からは現場において実際に苦労している現状など忌憚のない意見が述べられました。

森下陸幕長は「今回視察で得た現場の意見を陸幕に持ち帰り、中央でやれることはしっかりサポートしたい」と広報官を激励しました。

島根

隠岐の島町うみまちコンサート2023
10年ぶりの公演に満席の観客と感謝の声

海自呉音楽隊によるコンサート

島根地方協力本部は7月15日、隠岐の島町が主催する「隠岐の島町うみまちコンサート2023」を支援しました。

隠岐の島町に音楽隊が派遣されるのは2013年以来10年ぶりであり、より多くの人に鑑賞してもらいたいという思いから午前、午後の2回に分けて行われ、第1回公演は町内の中学校と高校を対象にし、第2回公演は一般市民向けに開催されました。どちらの回も客席（600席）はほぼ満席となりました。

海上自衛隊呉音楽隊は、アップテンポで夏らしい曲だけでなく、昭和のヒット曲や流行のポップソングをイントロクイズにするなどして会場を沸かせました。

また、ホワイエには広報ブースを設置し、島根地本がPR活動を行いました。

来場した生徒たちからは「島ではなかなか見ることができない音楽隊の姿を見れて嬉しかったです」「カッコよかったし、学ぶべき点がたくさんありました（吹奏楽部員）」といった感想が聞かれました。

また、隠岐の島町長や教育長などの関係者からも、本格的な演奏を聴ける貴重な機会であり、自衛隊に感謝しているとのお言葉をいただきました。

静岡

岸壁には約3000人の長蛇の列
「えんしゅう」一般公開などで市民と交流

人気の操舵席を説明する乗員

静岡地方協力本部は7月21日から23日の間、御前崎港東埠頭（御前崎市）において、多用途支援艦「えんしゅう」の特別・一般公開を行いました。

地元市民や観光客など、3日間で合計3240人が訪れたこのイベントでは、大学や高等学校の学生・生徒に対し、高橋本部長自らが陣頭に立ち、地本各課職員の力を結集し、千葉県自衛隊家族会安部会長はじめとする会員の方々のご協力を得て、用意した約700個のポケットティッシュを配布し自衛隊を広報することができました。

同艦は御前崎港が面している遠州灘から各付けられており、昨年9月に続き2年連続の入港となりました。

初日は御前崎市と牧之原市主催の入港歓迎行事が行われ、市長などから艦長や乗員へ歓迎の言葉と花束が贈られました。

2日目と3日目は艦内の一般公開が行われ、地元市民や観光客などが珍しい海上自衛隊の艦を見ようと、岸壁には長蛇の列ができました。

特に艦長が指示を出す艦長席や操作する操舵席が人気を集め、多くの子供たちが席に座って自衛官気分を味わっていました。

一方、岸壁では静岡地本が広報ブースを設置し、陸上自衛隊のトラックやバイクを展示したほか、航空自衛隊御前崎分屯基地も軽装甲機動車を展示し注目を集めていました。

また「えんしゅう」乗員による信号らっぱと手旗信号の体験ブースも設けられ、多くの家族連れが参加していました。

手旗を使って自分の名前を表したり、音を鳴らせて音を出すらっぱに苦戦したりと、大人も子供も夢中になっていました。

さらに、2日目は海上自衛官を目指す専門学校生が1日艦長を務め、一般公開での見学者を出迎えたり、3日目には航空自衛隊静浜基地（焼津市）のT-7初等練習機が御前崎港上空で展示飛行を行うなど、子供たちの夏休みの初めを飾る一大イベントとなっていました。

神奈川

大学生に語る「現場から見た国際貢献」
本部長が東海大学でゲストスピーカー

講義中の平井本部長（右奥）

神奈川地方協力本部長の平井克英1等海佐は7月4日、昨年に引き続き東海大学政治経済学部政治学科小川裕子教授が受け持つ「グローバルガバナンス論」の授業にゲストスピーカーとして招かれ、湘南キャンパス内の教室で「現場から見た国際貢献」というテーマで講義を行いました。

「グローバルガバナンス論」とは、テロや暴力的過激主義がどのように拡大する今日の世界をどのように統治していくのかを探求する学問であり、地球規模の課題に取り組む実務的な観点を学生に理解させることを目的に行われています。

100分に及ぶ講義では、防衛白書を基調としつつ、資源、エネルギーなどの海外依存度の高いわが国にとって海上交通路の安全確保のための海上防衛力がいかに重要であるか、そして海上自衛隊の海外任務とはどのようなものかについて、平井1佐自身の経験を踏まえて説明されました。特に10年以上続いている海賊対処行動については、国際社会が連携して取り組んだことで海賊行為が激減し、国際貢献における軍事活動の有用性を示すことができた事例として紹介し、政治学科1、2年生の約70人の学生は熱心に耳を傾けていました。

学生たちは、海賊が実在していることや海賊対処のための活動が国際的に展開され、海上自衛隊も主要な役割を担っていることを知り驚くとともに「海洋国家日本にとって海の安全保障を実現することがいかに重要か理解した」「海上自衛隊の活動が国際貢献につながっていることに日本人として誇らしく感じた」などの感想が寄せられました。

熊本

予備自衛官補辞令書交付式
志を持って予備自衛官への第一歩を踏み出す

宣誓書を読み上げる予備自衛官補

熊本地方協力本部は7月5日、熊本地方合同庁舎において、令和5年7月1日付で採用された予備自衛官補の辞令書交付式を行いました。

予備自衛官補制度は、主として自衛官未経験者を予備自衛官補（一般・技能）として採用し、一般は3年以内に50日、技能は2年以内に10日の教育訓練に参加し、必要な知識・技能を修得した後、予備自衛官として任用される制度です。

近年では令和2年の新型コロナウイルス感染症拡大防止や熊本豪雨災害に係る災害派遣活動において予備自衛官補出身の予備自衛官が活躍したことからも注目をされている制度です。

当日は、一般3人、技能2人のそれぞれの区分で採用された予備自衛官補が辞令書交付、宣誓、制度説明などに参加しました。

辞令書交付式の予行では、初めての自衛隊の行事に戸惑い、緊張している様子がうかがえましたが、本番では皆一様にきびきびとした動作を見せていました。

また、笹島本部長から各人に辞令書が手渡され「よろしくお願いします」と声を掛けられると、さらに引き締まった表情になり、続く「宣誓」では全員でしっかりとした口調で宣誓書を読み上げるなど、意識の高さが感じられました。

さらに制度説明では、予備自衛官任官までの流れおよび教育訓練参加時の予備自衛官の魅力を知っていただけるよう、一丸となって取り組んでいきたいと思います。

岩手

自衛官から予備自衛官へ 新たなる志・使命
第38普通科連隊 即応予備3等陸曹 大巻 昌樹

大巻即応予備3曹

私は、第9戦車大隊で約7年間勤務した後退職し、現在、株式会社アルゴスで整備士として勤務しています。自衛隊を退職してから、結婚し子供が生まれ、家族が増え、家族のために何かできることはないかと日々考えるようになりました。そんな中、結婚してすぐの年に発生した東日本大震災のことを思い出しました。

あの時は、家族のために自分のできることを精一杯やっていましたが、被災した方々の姿を見るたびに、より多くの人のために自衛官として培った経験を生かし、何かできることはないかという気持ちで一杯になりました。その思いから、私は即応予備自衛官に志願し、自衛官退職から6年ほど経過して、即応予備自衛官になりました。

採用された平成27年当初は、機甲科から普通科へ職種が変わったことで訓練に不安がありましたが、訓練を通じて知り合った仲間に、さまざまな企業、職種、年齢の方がいたおかげで、日々の生活や訓練について、自分にはない考えをいろいろ助言してもらうことができました。皆さん仲間思いで、団結力がとても強いので、不安はすぐに払拭され、現在までの7年間、出頭率100%を達成しています。

即応予備自衛官として心掛けていることがあります。それは、自分に限界を決めず、日々の生活、訓練など、自ら率先して行動していけるよう、頑張るということです。

そして、まだまだ認知度が低い即応予備自衛官制度をより多くの人に理解が広がるよう努力していきたいと思っています。

昨年度、所属する第38普通科連隊で優秀隊員に選ばれ表彰していただきました。受賞できたのは、自分の努力だけではなく、家族、企業主、中隊の仲間などさまざまな方々のご協力とご指導があったからこそだと思っています。

受賞したことを糧として、これからもより多くの人のために何ができるかを考え、日々頑張っていきたいと思っています。

熊本

地方協力本部臨時勤務を終えて
第7護衛隊 護衛艦あしがら 海士長 高田（たかた） 優海（ゆうみ）

説明中の高田士長

私は、5月17日から7月21日の期間、熊本募集案内所でリクルータとして勤務させていただきました。

約2カ月間にわたり、受け入れていただいた熊本地本の皆さまや、温かく送り出してくださった部隊の皆さまには心から感謝しております。

地本での主な活動として、サテライトブースでの勤務や各高校での説明会などに関わりました。下通りサテライトブースでの勤務は、自衛官としての実体験を通じて、幅広い年代の方々に自衛隊の仕事や魅力を伝える貴重な機会でした。幼い子供からご年配の方まで、自衛隊に対する一般的な印象が「厳しいや過酷なもの」であることが多かったのですが、私の経験を通して、実際には「やりがいと強い誇りを持てる仕事」であることを多くの方に理解していただけました。

また、熊本県には海上自衛隊の基地が存在せず、海上自衛隊という組織を改めて理解する機会となりました。加えて、多くの方々からの応援や励ましの言葉を受け、自衛官としての使命感や責任感を一層自覚することができました。

今回の経験を生かし、部隊での職務を遂行し、初心を忘れずに任務を全うしていきたいと思います。

神奈川

「命の授業」で学ぶ命への向き合い方
総合学習で小学生に命の大切さを伝える

「命の授業」を行う石井3佐（中央奥）

神奈川地方協力本部厚木募集案内所長の石井3等海佐は7月10日、大和市立桜丘小学校の6年生57人に対し、3、4時限目の時間で総合学習「命の授業」を行いました。

授業の目的は、国民の命を守り、危険な環境下でも命を失うことなく活動する自衛官から、命に対する向き合い方を聞き、命の大切さを学ぶというものでした。

自衛官は、危険な環境でも活き活きして任務ができるよう、平素の訓練で安全な手順や操作を繰り返し身につけること、信頼できる仲間がいるからこそ独りでも不安なく任務が遂行できることなどが説明されました。

また、日常において安全に生活する心構え、命あることに対する感謝について生徒と共に討議する様子が見られました。

生徒たちは過酷な環境での活動に驚きの声を上げ、失敗談や事故の話では深く沈黙し、命が助かった時の喜びには安心のため息が聞こえるなど、常に素直な反応を示してくれました。

授業の最後には「自分の命をかけてまで、なぜ国民の命を守れるのですか」「最も辛かったのはどんな時ですか」など時間一杯まで多くの質問が投げかけられ、関心の高さが感じられました。

後日、生徒から手紙が届き、そこには命を大切にすることの気付きや自衛隊の活動を応援する気持ちが込められておりました。中には将来自衛官になりたいとの感想もあり「命の授業」によって自衛隊の活動に対する理解が十分に促進されたものと感じました。